

伊丹の「酒造り唄」50年ぶり復活



もとり作業を再現しながら「酒造り唄」を歌う保存会のメンバー＝旧岡田家住宅で

清酒発祥の地・伊丹の文化継承へ

江戸時代、酒のまちとして大いに栄えた伊丹の酒蔵で醸造に携わったのは日本3大杜氏の一つ、丹波杜氏と配下の蔵人たちだ。彼らが酒蔵で歌った、伊丹の「酒造り唄」は、機械化の波の中で次第に歌われなくなっていたが、その保存活動に取り組み丹波杜氏たちによって復活。今年10月5日、ことば蔵で披露されることになった。

日本一だった伊丹の酒造業

鴻池稲荷祠(市文化財)によると、慶長5年(1600)、戦国武将、山中鹿介の子、山中新右衛門幸元がこれまでの酒造り酒から清酒を大量に醸造する技術を開発した。日本酒の産業革命だった。これをもって伊丹市は、清酒発祥の地を標榜している。酒蔵が最も多かったのは岡城の城下町、伊丹郷だった。酒造家たちは清酒を大消費地の江戸へ出荷、その味が評判を呼んで伊丹酒はうまい酒の代名詞となり、中には幕府の「御免酒」に選ばれる銘柄も。江戸後期、同じ摂津国の灘にその座を譲るまで日本一の生産量を誇った。

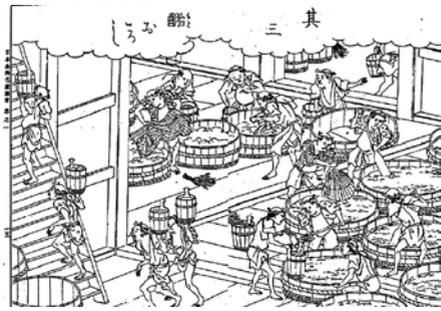
当時、酒造りは冬季に行われており、農閑期に丹波(現在の篠山市やその周辺)から出稼ぎにくる労働者が伊丹の酒造業を支えていた。

重要な役目をもっていた酒造り唄

酒造り唄は、蔵人が作業に集中したり、蔵人の長である杜氏が組織の統制をはかる一助となっていたが、もう一つ重要な役割を担っていた。蔵人たちは酒造りの各工程で、メイソンの作業をする者と、道具や材料を作業の進捗に合わせて準備する者とに分かれており、前者は材料を混ぜる時間などを唄で計り、後者は聞こえてくる唄で次の準備のタイミングを計っていた。両者の呼吸を合わせるために、酒造り唄は不可欠だったのだ。

歌詞に表れる蔵人の心情

晩秋に蔵入りした蔵人たちが最初に取り組むのは桶洗いと呼ばれる作業



もとおろし作業の風景 『日本山海名産図会』より

伊丹公論

復刊 第17号 通巻 36号

年4回発行 (次号は11月30日予定)

発行所
伊丹市立図書館(ことば蔵)
〒664-0895
伊丹市宮ノ前3-17-4
TEL 072-784-8170

編集
伊丹公論編集委員会

ぜ酸素を供給する作業を行った。蔵人たちは寒い酒蔵で睡魔と戦いながら作業をしなければならず、「もとかき唄」は実家の温かい布団で寝ていたころを思い出するような歌詞になっている。

業。酒造りに使う桶や小道具などをすべて熱湯で洗い流していた。そのときに歌われたのが「秋洗いの唄」だ。(歌詞は抜粋)

朝も早くから井筒にもたれ やつれせぬかと水鏡

丹波出てから早や今日で二十日 思い出します妻や子を

家族と離れて伊丹へ出てきたばかりとあって、蔵人たちの寂しさが歌詞にもにじみ出ている。

蒸し米に麴と水を加えてすり潰す「もとかき」の工程に入ると、蔵人は交代で夜中に起きてきて、もとかき混

親のうちでは朝寝の罰で 今も初夜起き夜中起き

親のうちでは朝寝の罰で 今も初夜起き夜中起き

次に、酒母に新しい蒸し米と麴と水を加えていく「もろみ仕込み」の工程に入ると、杜氏たちが体を清めて作業にとりかかるときに「風呂上がり唄」が歌われていた。この工程は3回に分けて行われ、その最後に歌われたのが「仕舞い唄」だ。伊丹や池田の地名が歌詞に登場し、花街で遊ぶ蔵人たちが歌われている。

池田伊丹の慣いかなれど 如何な店にも葎すだれ

これまで県内では、日本酒関係のイベントで「灘の酒造り唄」が歌われることはあったが、伊丹の酒造り唄が歌われるのは初めて。「復活!

伊丹三本松尾のない狐 私も二、三度だまされた

酒蔵跡地だったことば蔵で復活

酒造りに欠かせなかった酒造り唄は戦後、温度や時間が機械で管理されるようになり、本市の酒蔵では昭和40年(1965)ごろから歌われなくなった。

設立120余年になる「丹波杜氏組合」の有志は、丹波杜氏の酒造り文化や酒造り唄を伝承するため「丹波流酒造り唄保存会」を平成19年(2007)に結成。10周年の節目となる今年、ことば蔵で「復活!伊丹の酒造り唄」と銘打ち、酒造りの道具を実際に使いながら、伊丹の酒造り唄を披露することになった。ことば蔵は江戸時代、銘酒「剣菱」の酒蔵があった場所に建てられており、清酒との縁が深い。

伊丹の酒造り唄」に出演する同会の湊洋志さん(44)は「今回のイベントを機に、伊丹の酒造り唄や酒文化を広めて継承したい。当時、江戸へ酒を輸送するために鴻池の酒蔵から駄六川沿いの港町まで酒樽を運んだルートを巡るツアーなども、いつか企画してみたい」と話している。

酒蔵から酒造り唄が聞こえてくると冬の到来を感じていた、かつての伊丹に思いを巡らせたい。

「復活!伊丹の酒造り唄」は午後2時から1階交流フロアで開催。唄だけでなく尺八や三味線などの邦楽演奏も花を添えます。また、昭和57年(1982)に市が選定した「伊丹酒言頭」も披露されます。参加無料。詳しくはことば蔵交流事業担当(☎072・784・8170)へ。

小林丹城の絵があつた

達者な筆遣いでカニの姿

池田市立歴史館 民俗資料館

池田とその周辺の文化人たちに由来するサイイン帳のような文書の中に本紙の創刊者、小林丹城(本名、杖吉)の書と絵があると聞き、池田市立歴史民俗資料館を訪ねた。現存する丹城の資料の中で絵は極めて珍しい。その文書は蝸牛廬文庫(三)書画

冊 玄圃帖という。蝸牛廬文庫は、池田の郷土史家で漢詩人の林田良平の書齋号だ。林田は「伊丹公論」にもたびたび寄稿していた。

宝グループの創業者、小林一三も言葉を送っている。丹城の描いたカニは2匹。墨の濃淡を効かせ、動き回るカニの姿を表現している。当時、80歳前後とは思えない達者な筆遣いだ。絵の上には「横行自在」と、これも見事な筆致でしたためられている。

小林丹城が寄せた言葉

や絵は昭和26年、昭和28年(1951)、1953)に書かれており、明治に生まれ昭和初期に活躍した大阪や兵庫の俳人、歌人、漢詩人が多い。阪急東

ほかに伊丹ゆかりの人物としては、柿衛文庫創設者、岡田柿衛(本名利兵衛)が「仰向いて、とらばやと思ふ 柿探がす」という句を寄せた。この句は、市長職を退き、聖心女子大学教授に就任する60歳前後に書いたものと思われる。常日頃、柿の美しさを楽しんでいた柿衛らしい一句である。

近世は、池田も酒造りが盛んで酒造家たちが地域文化の担い手となっていた。同資料館の高野弥和子学芸員は「池田と伊丹の文化人たちの交流が伺える資料としても興味深い」と語っていた。

(丸晴子)

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉(筆名「丹城」)が、昭和11年(1936)1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。



「地域ぐるみで子どもたちを見守らなきゃ」

写真協力＝西田写真館

現代人物風景

いわゆる子ども食堂として昨年5月、サンシティホール内に開設した「さくらっこ食堂」を運営している。全国的に子ども会の数や地域行事が減少するなか、農業体験や夏祭り、

「はじめは子どもの貧困対策として『子ども食堂』を始めないかと誘われたんですが、私はただ単純に子どもが楽しめるのならやってみようと思って始めたんです」と話す。子ども食堂は、貧困家庭や孤食の子どもたちのために無料または安価で食事を提供する民間の取り組みだが、大池さんにとって、さくらっこ食堂は地域行事の延長なのだ。実際、食堂に来ている子どもは、友だちと一緒に晩ごはんを食べたり、夜に外へ出かけられるのがうれしいという理由で来ていることが多い。もちろん、経済的理由で来ている子どももいるが、地域の

「さくらっこ食堂」実行委員会委員長 大池津由美さん(57)

「はじめは子どもの貧困対策として『子ども食堂』を始めないかと誘われたんですが、私はただ単純に子どもが楽しめるのならやってみようと思って始めたんです」と話す。子ども食堂は、貧困家庭や孤食の子どもたちのために無料または安価で食事を提供する民間の取り組みだが、大池さんにとって、さくらっこ食堂は地域行事の延長なのだ。実際、食堂に来ている子どもは、友だちと一緒に晩ごはんを食べたり、夜に外へ出かけられるのがうれしいという理由で来ていることが多い。もちろん、経済的理由で来ている子どももいるが、地域の

市民とともに作り上げた伊丹の物語 「さよなら家族」上演へ 9月8日～10日、アイホール



『象と家族の話～国道171号線を行く象～』の舞台写真撮影：堀川高志

「伊丹の物語」と銘打ち、市民と一緒に舞台作品を作るプロジェクトを進めてきたアイホールが、3年かけてついに伊丹の物語「さよなら家族」を完成させ、9月8日～10日に上演する。

聞いた話をもとに写真と演劇が融合したパフォーマンスを二年目となる平成28年に上演した。昨年上演した短編の中から、象と家族の話「国道171号線を行く象」と震災の話「崩れた灯籠、瓦礫(がれき)の境内」それに新たなエピソードを加えた五場構成のお芝居「さよなら家族」が完成した。開演は8日が19時、9日は13時と18時、10日は11時と15時から。9日13時からの公演終了後には、演出を担当した劇作家ごまのはえさん(40)と写真提供者のアフタートークも予定されている。ごまのはえさんに話を聞いた。昭和30年(1955)から現在までの62年間を三世代にわたって描いた。ある家族の話ではあるけど、その家族にまつわる人たちが登場して



別れて、また別の人が登場し...と繰り返しながら話は広がっていき、思い出に残っていく。写真は記録に残すものだが、演劇は、出来事を忠実に語り継いでいかなければなりません。このプロジェクトに関わるまでは、伊丹といえは「お酒」と「空港」しか印象がなかったが、現在の伊丹の町並みを見て、昔の写真と見比べてみると面白かった。伊丹らしさをどう表現するか、伊丹らしさが深まっているのか、薄まっているのか色々と考えて、ようやく一本の作品にまとめることができた。* 入場料は一般3000円、65歳以上1500円、学生は1000円。問い合わせはアイホール(☎072・782・2000)まで。(龍田起代子)

老舗探訪

満井幸栄堂

伊丹市宮ノ前1-2-33 ☎072-782-2496



帰り道、気がつけば自然と笑顔になっていた。人と人との繋がりを大切にすること主人の素敵な笑顔が忘れられなかった。そのご主人は宮ノ前にある和菓子店「満井幸栄堂」の満井正夫さん(69)。創業は昭和25年(1950)。店名の由来を聞くと、創業者である幸二さんの「幸」の字を使い、「幸せに榮えるように」という意味が込められているという。宮ノ前市場から昭和61年(1986)に現在地に移転、以来30年間この地で営業している。店内には一粒栗入りの焼菓子「伊丹栗城」(1個216円)や栗入りのどら焼き「蔵太鼓」(1個172円)など、栗を使った人気商品が多く並んでいた。秋になれば、よもぎ団子や月見団子といった季節の商品がショーケースの中を彩るという。店の後継者は現時点でいない。このこともあって和菓子づくりの技術を絶やしたくないと、講師依頼を積極的に引き受けている。辻調理師専門学校と神戸国際調理専門学校非常勤講師として月に2、3回、授業を行っている。「若い人に教えるのはやっぱり楽しい」と顔をほころばせた。その技術力は折り紙付きで、平成元年(1989)の全国菓子大博覧会(菓子博)では名誉金賞を受賞した。今年も4月に伊勢で行われた菓子博に、色鮮やかな砂糖細工作品「瑞麗」を出展している。昨年11月ごろ構想を練り始め、約半年をかけて製作したという。今後の目標をたずねると「体の続く限り、細く長く続けていきたい」と話してくれた。これからも伊丹で質の高い素敵な和菓子を作り続けていってほしい。

お花の栄養召し上がれ 「食べると幸せになる薔薇ジャム」

伊丹には荒牧バラ公園、ローズレー梅ノ木などバラの名所が多い。そんな伊丹にふさわしい「食べると幸せになる薔薇ジャム」(90g 86円)がショップアンドカフェ「植物セラピー」にある。販売され人気だ。古代ローマでは、バラを食べると幸せになれる、という言い伝えがあり、バラの花びらにはタンニンが多く含まれ、粘膜保護作用があるので、のどの調子が良くない時にはおすすすめ。お湯割りやソーダ割りにして飲んでもおいしい。「食べると幸せになる薔薇ジャム」は、期間限定で10月中旬から「荒牧バラ公園みどりのプラザ」でも購入できる。店名の「あるある」とは、ハワイの言葉でハイビスカスのことだそう。代表の辻朝恵さん

は、今村勇さんとともにアロマセラピスト育成の講師業に10年以上携わっていたが、ハーブやアロマの良さをたくさんの人に知ってもらいたいと、南本町にこの店を開いて今年で4年目になる。「お花の栄養召し上がれ」をキャッチフレーズにさまざまな商品の販売をしている。現在では、北海道から沖縄まで全国から注文が殺到しているそう。数種類のハーブをブレンドした「ハーブティー ティーバッグ」(7包648円)やアロマオイルが粉になった業界初の画期的な商品「パウダリーアロマ」(1包180・500円)も人気だ。ハーブのやさしい味や香りを楽しみに、ぜひカフェにも訪れてほしい。(龍田起代子)

伊丹俳壇

「金魚」坪内稔典 選
(佛敎大学・京都敎育大学名誉敎授、柿衛文庫也雲軒塾頭)

手紙書く金魚が小石つつく音 屋部きよみ (伊丹市)

金魚の小石をつつく音が聞こえるのは、手紙を書く人がとても鋭敏になっているから。きつと恋文を書いているのだ。この句金魚がまるで絵のように鮮明。句が五・七・五の言葉の絵になっている。

優秀賞

進化して啼かなくなった金魚たち 近藤 千草 (伊丹市)
一斉に千の金魚が逃げるなり 渡辺 啓子 (神戸市西区)
海苔瓶に金魚の住まふ安下宿 小田 龍聖 (明石市)
どことなくヴィヴィアン・リーの金魚かな 和田 康 (奈良県奈良市)
見つめ合いふいと振られる蘭鐙に 戸川 富士子 (大阪府豊中市)

伊丹歌壇

「花火」尾崎まゆみ 選
(「玲瓏」選者、神戸新聞文芸短歌選者、現代歌人協会会員)

最優秀賞

恋愛にならない人とコンビニで花火を買って夏をこまかす えんどうけいこ (埼玉県狭山市)

コンビニと一緒に行くほど仲の良い二人。「花火を買って夏をこまかす」が効いている。「恋愛にならない」二人の関係に、線香花火のようにちかちかちかちかと光る恋心が見えてきてちよっぴり切ない。

優秀賞

淀川の花火大会邪魔をするビルをつまんで移動させたし 高山 葉月 (尼崎市)
真夜中にとりなりにも繋がないあなたの手から花火の匂ひ 有村 桔梗 (新潟県見附市)
咲き競ふ花火は美妙の彩みせて夜空いつばいをキャンパスとなす 岡田 良子 (大阪府豊中市)
冬のインドの結婚式は盛大な花火打上げ始まりぬ 森田 裕子 (神戸市西区)
夜勤中窓から緑地公園のわずかに光る輪郭を見る 堺 紀彦 (滋賀県高島市)



次回の兼題は、俳壇は「焼芋」、歌壇は「公園」とします。応募は1人各1作品、自作未発表作品に限る。応募締切は、10月15日(必着)。最優秀賞には図書券千円進呈。左のQRコードを利用すると、ケータイからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。

伊丹から全国へ向けて羽ばたけ

ご当地ユニット「プライム」誕生

今年1月、伊丹にご当地ユニットが誕生した。伊丹中央サンロード商店街の若手有志がプロデュースしたダンス&ボーカルグループ「PRIME (プライム)」。

メンバー(かっこ内は愛称)は、(写真右から)北端美優 (Minu)さん (19) ≪伊丹市≫、濱野陽菜 (Hina)さん (18) ≪西宮市≫、畑辺起津留 (TATSURU)さん (22) ≪伊丹市≫、伊藤江梨 (ELLY)さん (19) ≪同≫、三輪楓 (Kaede)さん (21) ≪大阪市≫の5人。100人を超える応募者の中から書類選考、オーディションを経て選ばれた。



プライムのメンバー＝伊丹中央サンロード商店街で

「商店街やまのちのにぎわい創出」「伊丹の魅力を全国に」がキャッチフレーズ。5人は今年2月20日、同商店街で臨空都市伊丹に因んだデビュー曲「TAKE OFF」を披露。この様子は翌日の読売、毎日、神戸各紙朝刊で紹介された。

その後、伊丹空港の「空楽フェスタ」など市内外のイベントに参加したあと、6月24日にはサンロード商店街で、凱旋コンサート。地元ファンや商店関係者が詰めかけるなか、元気がいっぱい2曲を披露、大きな喝さいを浴びていた。終了後の物販では、CDやオリジナル菓子などがよく売れていたほか、熱心なファンがいつまでもプライムのメンバーと歓談していて、身近なアイドルだと感じた。

メンバーに一言ずつ抱負を聞いてみた。【Minu】音楽活動を通じてたくさんの方

に勇気や感動を与えたい【Hina】歌とダンスを両立させ活動を続けたい【TATSURU】これからはもっと音楽活動を続けたい【ELLY】世界に通用する日本人アーティストになりたい【Kaede】作詞作曲をしてライブハウスツアーをしたい

暑気払いに、集まって一杯飲もうという事に。ただ飲むだけでは面白くない。二人羽織で化粧をして遊ぼうという話になり、二人で「組になる。二人羽織は蕎麦を食べさせるのがメジャーなのだ。が、ちよつと違う。1人は羽織を着て正座し両手をひざの上、もう1人は正座している人の後ろから羽織に潜り込み袖に手を通す。

元かみの きまぐれ ころも

暑気払い はいかない。みんなはみ出し顔がかゆいかゆいとうるさいが、「そこそこ、そうそう」といやはやハッハッハ、二人羽織の面白さ。悪戦苦闘の共同作業で仕上がりは上々。二人の女性ができ上がった。唇は大きく赤く鬼のごとし。ほつべはまるでアンパンマン。二人の男性は女性になりきって皆にお酒を注がれていた。笑いすぎて涙が止まらない暑気払いであった。(平きみえ)



▼全国酒豪マップ

自分にあてはめると「？」だが、面白いデータがある。元筑波大学教授の原田勝二さんが実施された「都道府県別・酒豪型遺伝子の出現率」調査である。これによると近畿地方を中心にそこから東西、南北に離れるほど、酒豪の比率が高くなっていることがうかがえる。

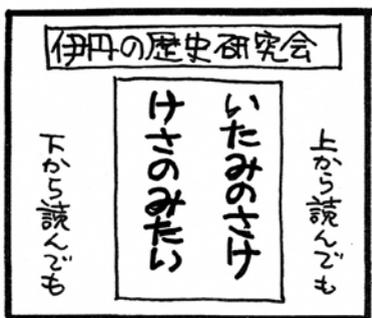
▼東北・九州が酒に強い

ちなみに酒豪型遺伝子の出現率トップは秋田県。2位岩手、4位福島、6位山形と東北勢が上位を占める。同率2位に鹿児島、同率7位に沖縄、9位に熊本が入り、九州勢の強さも目立つ。

東北勢が酒に強いのは秋田、山形など、いわゆる日本酒の酒どころも多いのでわかる気がするが、やはり九州も焼酎の消費ランキングでは上位を占めているように酒豪が多いのであろう。

▼「角打ち(かくうち)」 またまた、酒の話題。角打ちという言葉を聞かれたことがあるだろうか？ 答えは酒屋の中で立ち呑みをすることだ。店の一角(いっかく)で飲むかららしい。そう言えば、拙者が子どものころ、呑み助の親父が

タンジロ先生 はやしやよい



林やよい 伊丹市在住。毎日新聞兵庫版にイラストエッセイ「くるまいますまいる」を連載中。

「角打ち(かくうち)」 またまた、酒の話題。角打ちという言葉を聞かれたことがあるだろうか？ 答えは酒屋の中で立ち呑みをすることだ。店の一角(いっかく)で飲むかららしい。そう言えば、拙者が子どものころ、呑み助の親父が

酒屋で「酒くれ」と言うから、たっぷり酒を買って帰る(テイクアウトする)のかと思いきや、まさかのイトインでのコップ酒だった！ この角打ちをする親父を見て、子どもながら「かつこええ」と思っていた。酒豪ランクは39位の県出身であるが...

